

学位申請論文審査要旨

作成日:2017年3月31日

論文題目: 宗教教育におけるナラティブ・ペダゴジーの理論と実践

- 学修者における text と context の調和を求めて -

学位申請者: 徐有珍

申請学位: 博士(神学)

論文審査委員

主査: 本学 神学研究科(教授) 稲垣 久和

副査: 東京神学大学(教授) 朴 憲郁

副査: 本学 神学研究科(教授) 木内 伸嘉

副査: 本学 神学研究科(教授) 岡村 直樹

学位論文審査要旨

「宗教教育におけるナラティブ・ペダゴジーの理論と実践:学修者における text と context の調和を求めて」と題する本論文では、宗教教育の現場から収集されたデータをもとに、ナラティブ・ペダゴジーの効果や、その有用性が論じられている。ナラティブ・ペダゴジーとは、20世紀後半から世界的に注目を集めるようになった比較的新しい教育方法論の展開であり、物語を聞くのみならず、創作したり、語ったり、スキットで表現したりと言った、多角的なアプローチを含むものであると説明されている。論文は、ナラティブ・ペダゴジーの教育学的、キリスト教神学的、心理学的、および宗教教育学的背景に関する考察の上に、実践的な検証を展開させる形で構成されている。本研究の最も大きな特徴は、量的に表すことの難しい、クラス学修を通して起こった学生の内面的変化を、グラウンデッドセオリーという質的な研究方法を用いて取り扱っている部分である。具体的には、Michel Quinn Patton の質的研究方法論がデータ収集とデータ分析に、また Heidi Hayes Jacobs のカリキュラムデザイン論が授業のデザインに用いられている。研究では、大学の新生の必修クラスから3年間にわたってデータが収集されており、対象となった学生の総数は80人を超える。これは質的な研究としては比較的大きな規模であり、データの信頼性にもプラスに作用している。本研究は、日本の大学の宗教教育における、ナラティブ・ペダゴジーの本格的な実践的検証として独創的であり、その学術的価値は高い。

収集された質的なデータの分析から浮かび上がってきたナラティブ・ペダゴジーの宗教教育上の効果には、「主題に対する理解の深まり」「主題に対する態度の変化や認識の拡張」といった、クラスにおいて設定された教育主題に直接結びつくものが挙げられている。また「知識と経験の連結」「学びにおける自主性の向上」という教育効果は、論文の冒頭に記された宗教的知識の断片化の課題に対するひとつの答えであり、ナラティブ・ペダゴジーの宗教教育的価値の根幹を成す部分として位置付けられている。さらに興味深いのは、「他者理解・受容・協働に関

する発見」「共同体意識の向上」「共感性の醸成」といった、教育主題とは直接関わらないものの、宗教教育のみならず、一般教育の観点からも重要な教育効果が挙げられていることであろう。論文の最終章には、子供から大人までを対象にした、ナラティブ・ペダゴジーを用いた宗教教育の具体的なプログラムの提言もなされており、宗教教育の実践面においても価値のある論文であると言えるだろう。

以上の所見により、本論文は、博士論文として適格であると判断する。

最終試験結果の要旨

2017年2月2日に行われた口述試験の結果、申請論文が学位を授与するに足りる水準にあり、かつ十分な研究能力を有することが確認された。よって本委員会は、一致して徐有珍が博士の学位が授与されるに相応しいものと判断した。